

आयुस् あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足80

個人的読書体験論

京都文教大学・京都文教短期大学図書館長

総合社会学部 教授(植民地主義、帝国研究) 遠藤 央

研究用に読む本や論文とは別に、若いときに読んでおいて本当に良かったと思える本は確実にあります。世界が広がるような読書、世界の見方が変わるような読書です。就職をしていないときには思うように本を買えるほどの収入はありませんので、図書館で借りるか古本を探すかです。そんな中から何冊か印象深い本を紹介します。

大学に入学してすぐに図書館で出会ったのが民俗学の研究で知られる『南方熊楠全集』(平凡社)です。40数年前ですので、知る人ぞ知る、マイナーな存在でしたが、その内容のすごさに驚き、一年生の最後のほうで書いたレポートでとりあげました。柳田国男、折口信夫を本格的に読む前に南方熊楠を読めたことはこのうえなく幸運だったように思います。高価な全集をすべては買えないので、気に入った何冊かを無理して購入しました。今ではエコロジーの先駆者などとして盛んに言及されますが、日本の事象を世界的な枠組みの中で思考する姿勢が卓越しています。柳田国男の思考の癖について一本だけ論文を書いたことがありますが、その隠し味は南方熊楠です。

大学院の修士論文を執筆中に、専門書と論文漬け生活の「解毒剤」として就寝前に少しずつ読んでいたのが、武田百合子の富士日記(中公文庫、全3巻)です。小説家武田泰淳の妻による、昭和39年から昭和51年までの富士山麓の別荘での生活を記した日記ですが、彼女の文章が素晴らしい。一人娘が写真家の武田花。この日記にも花の書いた文章が挿入されていますが、その印象が強すぎて、いつまでたっても武田花はカメラを持った少女としかイメージできません。入院した泰淳の看病をしながらの日記の最後の文章は「そのあ

と、菓をのんで、せいせいしたように眠りに入った。私と花子、起きて明朝を待つ。向かいの岡の新築のマンションに、いつまで経っても明かりが煌々としている部屋が2つあって、部屋の中の椅子や道具まではっきりみえている。人が立ったり歩いたりするのも見える。眠くなりそうになると、その部屋をみつめて夜が明けるのを待った。夜中ずっと雨が降って、風もつよくなった。朝になると風はやんで、小ぶりの雨だけになった」。このリズム感あふれる文章。論文調の文章に疲れたときにぴったりだったのだと今更ながら思います。

ちなみに、修士論文の隠し味は多木浩二の『生きられた家—経験と象徴』(青土社)です。そのエピソードに引用されている「とびぬけて人間的な事実といえば、それはおそらく道具を創造したことよりも時間と空間を手なづけた、つまり人間的な時間と空間を創造したことであろう」というフランスの考古学者、アンドレ・ルロワ＝グーランのことばは、かれの主著『身ぶりと言葉』(新潮社)からのものですが、この本は今も書架に並んでいます。1988年2月7日、中央線武蔵境駅前の古書店で購入となっています。かれの対話集、『世界の根源—先史絵画・神話・記号』(言叢社)は読みやすいのでおすすめです。

交通事故のために新しい作品に出会うことはなくなりましたが、岡崎京子の漫画『リバーズ・エッジ』(宝島社)も印象的です。1994年発行の単行本が書架にありますが、彼女の単行本は未だにほとんど処分せずに所有しています。若いときに訪れる、人生が変化する「あの瞬間」が間違いなく書き込まれているように思えて仕方ありません。河原で見つけた死体に「何かこの死体をみる

とほっとするんだ。自分が生きてるのか死んでるのかいつも分からないけど。この死体をみると勇気が出るんだ。「それからあたし達はしばらく死体をみていた。……もしかしてもうあたしはすでに死んで、でもそれを知らずに生きてんのかなあと考えた」というくだり。映画の「スタンド・バイ・ミー」との類似が指摘されたりもし

ましたが、人生のある瞬間を「通過」している感覚が実感できます。

ほかに内田百閒の小説なども思い出深いものがあります。字数がつきてしまいましたが、映画でいえばルノワール、ブニエールをみると世界が変わります。

(えんどう ひさし)

*** 学問ははじめて見たつるはきわめて大事なり ***

京都文教大学・京都文教短期大学学長(仏教学) 平岡 聡

時代の変化とともに、人は本を読まなくなっているようだ。若者は漫画さえも読まなくなっていると聞く。今や活字になった情報はインターネットを通じての断片的なものであり、しかもその情報は誰でも不特定多数の大衆に向けて発信できるから、情報自体の信憑性も無批判に信じることはできない。大学教育に携わる身としては、なんとも嘆かわしい状況だ。

浄土宗を開いた法然は、熱心な読書家でもあった。納得のいく仏教に遭遇するまで、法然は比叡山の黒谷にある青龍寺に籠もって、「一切経」という膨大な典籍を5回、読破したという。その法然が一生に1回だけ、書物を開かなかった日があった。木曾義仲が京の都に乱入したときだ。「われ聖經(経典)をみざる日なし、木曾の冠者(木曾義仲)、花洛(京)に乱入のとき、ただ1日聖經を見ざりき」と伝えられている。私も職業柄、他の人よりは本を読んでいるつもりだが、これまで本を読まなかった日は沢山あるので、この法然のエピソードを思い起こすたびに、忸怩たる思いがする。

さて、前置きが長くなったが、本題に入ろう。「書物」と一口に言っても、さまざまな書物がある。物語、紀行文、随筆、解説書、研究書など、細かく分類すればきりが無い。それぞれに読書の利点はあるだろう。たとえば、物語を読めば、この現実の世にいながらにして、架空の時空を経験することができるし、紀行文を読めば、下宿の6畳間にいても、しばし旅行気分が味わえる。しかし、ここは大学であるから、研究書(あるいは研究論文)を取り上げることにしよう。

研究書を読むことの利点は何か。いろいろあるが、その一つは短時間で膨大な情報が得られる点である。おそらくその著者はその研究書をまとめ

るために、かなりの時間(たとえば3年、5年)を費やしているはずだ。ライフワークとなるような研究書ともなれば、費やした時間は30年以上にも及ぶだろう。しかし、いったん書物として出版されると、それを読めば、数日で自分の知らなかった知見が獲得できる。

自分で一からそれを調べれば大変だが、研究書を読めば、圧倒的に時間を短縮して多くの情報が得られるのだ。そこに書かれていることを鵜呑みにするのではなく、クリティカル(批判的)に読むことは重要だが、これが私の考える研究書を読むことの利点だ。信頼できる研究書をじっくりと読み込めば、過去の先人たちが積み上げてきた学問的成果を短時間で修得することができよう。

しかし、大学での学びはここで終わらない。先人たちの学問的成果を知ること自体が大学教育の目的ではないからだ。それはあくまで手段。ではそれを手段として、何をを目指すのか。それは「新たな知見の創造」だ。過去の学問的成果を踏まえ、今度は学生の皆さん(あるいはわれわれ教員)が、今まで誰も気づいていないオリジナルな知見を一つ積み上げるのである。

論文を執筆するさい、まずはその分野の先行研究を紹介するのが一般的だ。その目的は何か。自分の発見した知見がすでに過去の研究者によって明らかにされているなら、わざわざその論文を発表する意味はないので、その確認をすることが第1の目的。また、自分の研究は過去の先行研究と何がどう違うのかを明らかにするのが第2の目的。つまり、先行研究に目を通すことは、自分の研究のオリジナリティ(独創性)を担保するのに必要なのである。

ここで再び、法然の言葉を紹介しよう。「学問ははじめて見たつるはきわめて大事なり。師の説

を伝習するは易きなり」という言葉。「先人の説をそのまま習い伝えることは簡単だが、学問では自分の独創性（はじめて見たつる）を打ち出すことがきわめて重要である」という意味である。

みなさんも先学の研究書と格闘し、小さくても

いいからオリジナルな知見を1つ創造してほしい。その経験は大学を卒業してからも、必ず何かの役に立つはずだ。

(ひらおか さとし)

✿✿✿ Go To Read !! ~図書館へ行こう~ ✿✿✿

食物栄養学科・准教授（給食管理、調理学） 坂本 千科絵

あーゆすの原稿依頼を受けたのは確か1カ月以上前……。

その間、研究室に貼ってあるメモ切を横目に、「オンライン授業がまだ終わっていない」、「出欠管理をしなきゃ」、「定期試験の問題作ってから」、「成績評価しなきゃ」、「栄養士校外実習直前指導が始まる」、「校外実習の個別指導をしなきゃ」と言い訳ばかりしてまったく手をつけず、いたずらに日々が過ぎてしまいました。

これを書いている今日は、メモまでちょうど1週間という日です。私が原稿を考える時間、書いたものを少し寝かして読み直す時間、誰かに日本語がおかしくないか見てもらう時間等々を考えると、もうギリギリのラインにきました。普段、学生には「スケジュール管理をしっかりしなさい」と言っているのに、なんでこうなるかな……と意味づつ、PCに向かっていきます（前日ではなく1週間前に始めていることを評価してほしいと思いながら）。

さて、言い訳はこれくらいにして、私は幼いころから「趣味は？」と聞かれたら「読書」と答えていました。ある日突然、字がスラスラと読めるようになっていくことに、「この子、神童かも？」と親を驚かせたのも、「千科絵は字が並んでいたから、それだけで満足なんか？」と親に聞かれたのも、本ばかり読んでいたからです。好きな作家がいるわけでもなく、好きなジャンルがある訳でもない。ただただ「字を読んでいる」子供でした。

なぜ、ただ字を読んでいたのか？おそらく、その理由は、「本を読んでいたれば、誰とも話さなくていいから」なのです。今もなお私の中にくすぶる「他人とコミュニケーションを取るのが苦手」という気持ちが、幼い私を読書に駆り立てていたのだと思っています。思い起こせば、親戚のおじさんに、「千科絵ちゃんと言えば、小さい頃お父さんの背中に背中をくっつけて、ずっと本読んで

いたよね。おじさんの話に全然返事しなかったんだから」と言われたことがありました。これを改めて言われた時には、私も立派なおばちゃんになっていたのだから、「今も同じことしたら、父の背中が折れちゃいますよ」と言って、おじさんを困らせてしまったことがあります。

こんな感じでなんとなく本を読み続けてきましたが、それはそれで私の人生に役立っているように思います。

- ①「字を読むのが早い」→書類や教科書を読むのが早い。
- ②「想像力が豊かになった」→周りの人が言いそうなことや考えていることがわかる。
- ③「人にはいろいろな考えがあるということを理解している」→他人の考えに耳を傾けられるようになった。とはいえ、結構な頑固者なので、意見は聞くけど自分の意見は曲げないのです。

うーん、元図書館委員として「本を読んだらいいことあるよ」と伝えたいのに、なかなかズバツと言いつける体験がなくて申し訳ないです。あ、1つだけ、良いことを思いつきました！

好きな作家も好きなジャンルもない人、家にいることが増えたし本でも読もうかな、でも本を選ぶのは面倒だなと思っている人!!

図書館へ行きましょう!!!

図書館には「おすすめの本コーナー」があります。テーマに沿って、多種多様な本が並んでいます。同じ分野（テーマ）の本がまとまっているので、選書するのが面倒な人にも「おすすめの本コーナー」は便利です。お金がかからないので、「高い本を買ったのに面白くない（怒）」ということもありません。すごく興味があるわけでもないけど、ちょっと読んでみようかな？という本を読むのに最適です。急に課題が増えて、本が読め

なくなったら、期限内に返却すればいいのです。私も短大図書館で専門書を借りるより、自分の自由時間に読む本を借りる方が多いくらいです。

そんな私のおススメの3冊は……またいつか、あーゆすの原稿依頼が来た時にでも紹介します!!
(さかもと ちかえ)

心惹かれた言葉

総合社会学部 総合社会学科2回生 山本真衣

“一杯のコーヒーにも40年の思い出”トルコのことわざである。そしてこのことわざは、小説『珈琲店タレーランの事件簿』（岡崎琢磨、宝島社）の2作目に登場する。舞台は京都の珈琲店「タレーラン」。頭脳明晰な女性バリスタ切間美星と常連客の青年アオヤマが、日々巻き起こる謎を解き明かしていくグルメ・ミステリー小説である。

冒頭のことわざにある40年とは、とても長い時間を意味するそうだ。「つまりこのことわざは、コーヒーを淹れてあげるといったささやかな親切も、受けた側にとっては長い間忘れられないもの、ということを表します。まして、自分の命を犠牲にするほどの親切なら、深い愛情ならー」幼い頃、美星は川に転落し、濁流に飲み込まれて流されそうになる。父親は助けようと川に飛び込んだが、そのまま亡くなってしまう。父親を懐古し、口にしたこの言葉を目にした瞬間、私はある出来事を思い出した。

1年前、通学途中の車内で外国人観光客に、奈良への行き方を尋ねられた。彼女たちが持っていた英語の地図を借り、スマホで乗り換える駅を調べたが、使い慣れない言語で説明することや、決して詳しくない場所へと案内することに、あの時の私は大きな不安を感じていた。しかし、電車は止まってくれない。早くしなければと自分だけでは判断できず困っていた時、隣のサラリーマンの方が助けてくれた。私と一緒に調べてくれたのである。周りの助けもあって、なんとか道案内をすることができた。彼女たちは別れ際、「ありがとう」と日本語で伝えてくれた。この旅を素敵な思い出にしてほしい、そんな思いで「良い1日にしてください」と伝えた。私の拙い英語は、わかりにくかったに違いない。それでも理解しようと熱心に耳を傾け、最後には笑顔で手を振ってくれた。

あの場で受けた親切は、私にとって長い間忘れられないものになっている。サラリーマンの方の親切は、心強いものであった。外国人観光客で

ある彼女たちの親切は、心温まるものであった。たった15分程度という短い時間ではあったが、素晴らしい経験をすることができ、なんだか胸がいっぱいになったことを今でも記憶している。何年たってもこの気持ちは色褪せることなく、私の心に生き続けるだろう。これまで、家族や友人、時には見ず知らずの人から数々の親切を受け取ってきた。どのような親切であっても、必ず長い間忘れられない優しさや温かい気持ちを届けることができるのだと、本を通して出会った言葉に気づかされた。

もし、なぜ本を読むのかと聞かれた時、何と答えるだろう。本を読む理由は様々である。例えば、本が好きだから、知識を増やしたいから、情報を収集したいから。私なら「言葉」と出会いたいからと答える。本は、たくさんの言葉で溢れている。こうなりたい、こうでありたいという目標や、つらく苦しい時に心の拠り所となる言葉がそこにあるかもしれない。時には、自分の人生を変えてくれるような言葉にだって出会えるかもしれない。映画やドラマを通して出会える言葉も少なくはないが、本には映像というものが無い。文字から想像する世界は、それぞれ描かれ方が違う。十人十色である。だから面白い。私が大切にしたいと感じた言葉も、他の誰かには響かないことだってあるだろう。その人の状況や心情、経験によって、言葉の受け止め方は大きく変わる。本から想像した世界と自分とを照らし合わせた時、まるで自分自身に向けられた「言葉」ではないかと錯覚してしまいそうになる、あの瞬間が私は大好きだ。

『珈琲店タレーランの事件簿』に登場する美星の言葉には、優しく包み込んでくれるような温かさや真っ直ぐな美しさがある。彼女が紡ぐ言葉から気づかされることはたくさんあった。ぜひ一度、この本を手にとってほしい。忘れたくない、心にとどめておきたい、そんな「言葉」にあなとも出会えることを願って。

(やまもと まい)

本にまつわる思い出 読書による意識の変革

臨床心理学部 臨床心理学科4回生 永村由紀

本を読む喜び、その効用は多くの人が書き、述べている。この“あーゆず”においても同様、そこで少し違った観点から本の虫の自己変革を書いてみたい。

作家・町田康との出会いは私にとって、まさに目からウロコであった。当時、新聞連載のエッセイ『爆発道祖神』を読むたびに、その自在な表現力に圧倒された。また、文章のつくりから筆者が若いのか年寄りか、皆目分からない。極め付きの読書家で大変な勉強家で超大物。なんて斬新な発想と言葉の使い方、ただただ感嘆しきり、独特の文体を持つ町田ワールドにのめり込んだ。どんな人？会ってみたい。

その新進気鋭の作家に会うチャンスが！2002年7月5日、新宿紀伊国屋書店本店に向向いたのは、『爆発道祖神』のサイン会があったから。(古いなあ、すみません、人間古くて)。

大阪府出身の1962年生まれ、早い時期から詩を書きパンクロック歌手として活動、やや遅咲きの作家デビューを果たしているなどの情報は仕入れていた。当日、サイン会の行列がしずしずと進み、ついに先頭に。ふんわり漆黒の髪はセミロング、しゃれたフレームの眼鏡の若者が優しい眼差しをこちらに向け、「お名前は」、その日が初版の単行本の見開きに丁寧なサインをし、印を押し、つと手を伸ばし握手して下さった。柔らかくて温かな大きな掌に包まれて、私は天にも昇る心地がした。まず、その文章に心酔し、次にその穏やかな人柄に魅了されたのだ。冷徹な眼差しで作中人物の性格を考察し描写する段落出現、と思いきや突如、ハチャメチャな表現(関西出身の作家、筒井康隆・中島らもの影響をとりわけ強く受けての、とわかる)に目がくらみ、その変幻自在な場面展開に激しく心を揺さぶられる。そして読み手は「いいよいいよ。ぜーんぜんオッケーだよ」、町田ワールドに一も二もなく飛び込み一緒にトリップするのだ。(かぎ括弧の中、町田康さんの文章からパクりました。)

次に時代小説、「パンク侍、斬られて候」。オウム真理教の死刑囚・麻原彰晃を思わせる無差別殺人組織『腹ふり党』の教祖がむちゃくちゃな論理を展開、信者をだまらかしては惨殺を繰り返す。それを成敗しにかかる牢人・掛十之進が主人公、伏線として主人公の側に見え隠れする美少女

が彼の慕情を恋情に変化させていく。結末のどんでん返しが、「この世は虚か実か」を深く考えさせる、恐らく筆者の町田康とともに。物語冒頭で父親を主人公・掛に意味なく斬り殺された盲目の娘、六旬まりは『腹ふり党』教祖に眼を治してもらい名前をろん、と変えて父親殺しのこの牢人に接近する。「私たちを取り巻く現実が虚妄の現実だからです」とこのパンク侍に告げ、不意を突いて鋭い竹の剣で刺す。「なぜです」に、「むかつくからよ」「こんな世界だからこそ絶対に譲れないことがあるのよ」。そしてパンク侍・掛十之進は絶命する。

——本は読むなら面白ければいい、そこに自分の目を開くような、世界が広がるような発見があればなおいい。小説に限れば異世界に飛ぶワクワクドキドキ感がたまらなくいい、そんな風になんとなく考えてきた。しかし、ファンタジーとたわむれるのと同じくらい重要なのが、本によって培われる丈夫で健康な精神ではないか。想像を絶する困難に直面し、その解決に格闘しているさなかにあっても希望を見出して前進して行ける力。それはネガ・ポジ両側面から人生を耕す力になり得る想像力が読書によって養われること。これに尽きるのではないか。人それぞれが生きている世界は狭い。言い換えれば、自ら経験したり考えたりすることには限りがある。フィクション世界にいざなわれた読者は、他者の経験を我がもののように感じ、考えることができる。日常から非日常に羽ばたく力は同時に現実生活をこなすための大きな原動力になる。取り澄ました仮面を束の間脱ぎ、ワルい奴を装う演技指導を受ける感じ。時に常識という軌道をそれて、ハメを外すならず者にチェンジさせる変身術、それも読書のなせるわざではないだろうか。

町田康さんは私の石頭、「夏目漱石ばりの文章を書くことがベスト」を見事、突き崩した。加えて、トンデモ世界にすっ飛んでいく快感、悪口雑言ナニするものぞ、己の心を存分に書いて放出する！その一大ムーブメント(わが心の内にひそかに起こっただけです)が私の精神をも解きほぐし自在な動きと物の考え方を可能にしたように感じる。そして子煩悩ならぬ犬煩悩、猫煩悩でもある町田康さんに心より町田康讃を捧げるのである。

(ながむら ゆき)

🍎🍎🍎 私のすすめる3冊（こども教育学部編） 🍎🍎🍎

わすれぐさ 「萱草に寄す：詩集」

立原道造 著／日本図書センター 1999

夭逝の詩人「立原道造」による、たまたなく繊細な思春期の感性をやさしく謳った詩集です。ソネットという形式で、淡くもろく、恋や自然をさわやかに謳っています。若者の愛を包み込むような描写は、読む人の心を離しません。人に恋心を抱き始めた頃に読めば心にしみます。若いあなたむけの一冊です。

教授 坂野治利（ばんの はるとし）

「あるがままに自閉症です：東田直樹の見つめる世界」

東田直樹 著／エスコアール出版部 2013

著者の東田直樹氏は自閉症で他者と会話が出来ません。しかし、たとえ、話せなくても彼の心には、しっかりと言葉を持っています。東田直樹氏の心の言葉は、一語一語に大切に綴られ、自閉症である彼の見つめる世界に一歩足を踏み込むと、彼なりの他者を気遣う心に触れることができます。同じ空を見てもそこには青空があり、曇り空もあります。しかし、「どんな空も美しい」という著者の言葉が声になり、私の心を大きく包み込んでいくのです。皆さんにも東田さんの心が届くことと信じています。

教授 寺田博幸（てらだ ひろゆき）

「えほんのせかい こどものせかい」

松岡亨子 著／文藝春秋（文春文庫） 2017

著者の松岡亨子さんが読み聞かせの方法や子どもに喜ばれた絵本34冊を楽しく教えてくれる絵本ガイドです。絵本が子どもの言葉と心、そして生活を支えるものであることにも気づかせてくれます。これから保育者や学校の先生を目指す人、お父さんやお母さんになる人……子どもにかかわるすべての人におすすめしたい1冊です。

講師 中橋 葵（なかはし あおい）